発行所
三池炭鉱労働組合
大牟田市不知火町2
電話（53）3033番
（53）3034番
編集兼発行人　甲斐俊久
半年間1,200円　送料共

会社は責任をとれ

合同社葬の日、故吉田哲郎さんの遺族の人びと。ひときわ大きな悲しみに打ちひしがれた未亡人と、ひとり子の佳子ちゃん、実母＝セツノさん、実兄＝隆康さん方。胸の底の怒りはいかばかりか。

故・吉田哲郎さん

大災害裁判公判の日程連絡

二大裁判の次回公判日程が、次のようにきまっています。一人でも多くの仲間を誘い合って、法廷を埋めましょう。

大災害裁判公判　七月三十一日午後一時十分から、同じく福岡地方裁判所で。前回、組合側弁護団が行った弁論に対する、会社側弁護団の反対側からする弁論が充てられています。いずれも重大な公判です。

九・二八 坑内火災裁判公判　十月一日午後一時十分から、福岡地裁で。引き続き吉田曙病院長の証言（会社側弁護士による反対尋問）があります。一人でも多く、法廷にかけつけましょう。

大牟田で
非核誓う決起集会

十日午後五時から大牟田市役所前で〝非核三原則を堅持し、ミッドウエーの入港に抗議する大牟田地区集会〟が開かれた。この日は右の主張をアピールするため朝から座り込みを行ったが、右翼の活発ななか、千人前後が結集、非核反戦平和の誓いを固めた。

三川鉱で落盤、六人が犠牲に
組合員の吉田さんも
三池労組、ストを打ち抗議

このほど三川鉱で起きた落盤は、そのため六人もの命がもぎ取られた事実とともに、テレビや新聞などのマスコミによって全国に伝えられた。広るが怒りのなか、三池労組はこれらの人びとの犠牲を心から悼むと同時に、団体交渉を通じて三井石炭にさっそく、「今次災害の会社責任を明らかにし、遺族に対し万全の措置を取るよう」要求した。

十一日、三井石炭三池鉱業所（前村正一所長）の三川鉱（野口幸光鉱長）で落盤が起き、六人の坑内労働者がその下敷となり犠牲になった。

六人とは、次の人びとである。

機械関係（敬称は省略）
山本　勇一（26歳。大牟田市小浜九八の一。係員）
宮永　鉄男（39歳。熊本県玉名郡長洲町長洲新山）
村島　昭吾（51歳。熊本県荒尾市樺）

電気関係（敬称は省略）
吉田　哲郎（43歳。大牟田市勝立、字柳坂四〇の四七）
村上安紀男（36歳。熊本県荒尾市孤屋一一九〇。係員）
米田　正敏（51歳。熊本県荒尾市西原社宅十六棟）

右のうち、電気員の吉田哲郎さんは三池労組の組合員だった。

×

落盤は、その日午後三時二十五分ごろ、三川鉱の坑口から二万六百六十メートルはいった、有明海の水面下約四百メートルほどのところで、本層西七十卸東五片向の掘進坑道で起きた。

六月初めに掘進にはいったばかりで、落盤は約百立方メートルにわたって起き、同坑道は完全に塞がれてしまった。惨胆たる状態を呈していたというが、そのなかに深ぶかと、六人の人びとは埋まってしまったのだった。

残念ながら全員死亡という悲しい現実となったが、遺体の収容には時間がかかり、全遺体を収容し終ったのは、災害発生からほぼ二十時間以上たった、翌日の午前十一時四十五分ごろだった。

昭和三十八年の十一月九日にあの炭じん大爆発を、それから四年後の四十二年九月二十八日坑内火災をと、ひき続き大災害をひき起こした三川鉱で三たびくり返された大災害だった。

三池労組は、社葬の日の十三日二十四時間ストを打ち抗議した。

県警が捜査開始

福岡県警はすでに災害について捜査を始めており、また福岡鉱山保安監督署も調査に乗り出している。今後の動向を注目してゆかなければならぬ。

「何べん災害ばくり返すとすむとか」
会社幹部の弔辞に怒り
合同社葬

霊前に弔辞を捧げる組合長

三川鉱で起きた落盤で犠牲となった六人の人びとの合同社葬は十三日、荒尾市の市民体育館で営まれた。祭壇には六つの柩が安置され、そのすぐ正面近くに喪服姿の遺族たちがならび、告別のために集まった人びとがそのまわりから囲んで会場を埋めた。

遺族のなかには、まだ生まれて間もない赤ちゃんを抱いた若い未亡人の姿も混っていて、遺族たちの悲しみとくやしさを思えば言葉はなかった。

とくに、まだこれからという四十三歳の若さで命を奪われた故吉田哲郎さんは三池労組員で、遺族＝妻・幸子さん（40歳）、ひとり子の佳子ちゃん（11歳。小学五年生）、実母・セツノさん（73歳）、実兄・吉田隆康さん（50歳）たちの姿を見ては、資本に対して湧きあがる怒りを押さえることができなかった。

前村・三井石炭三池鉱業所長をはじめ、会社幹部たちのこの日の弔辞は、いちように「余りの無情なできごとは痛恨きわまりなく、このうえは保安に万全を期していくことをお誓いします」のきまり文句で、三池労組員や家族は「災害をひき起こしては労働者を殺し続け、そのたびに同じ言葉を何べんくり返すとすむとか」と唇をかみしめた。

なお沖組合長は組合を代表して霊前に、「保安よりも生産を第一に考える会社の誤った姿勢こそが、まぎれもなく今回の重大災害をひき起こしたのです。ご遺族のご胸中を察して断腸の思いです。も早や、働く者の権利の主張が表現されたあなたのマンガを期待できなくなりましたが、わたくしたちはあなたの意志を受け継ぎ、総力をあげ、災害を再び起こさせないために闘います」、と決意をこめ弔辞をささげた。

その日社葬が終ったあと、三池労組の組合員や家族はそのままその場に居残り、さっそく会社の石井正則人事部長、原田拓郎保安部長、高岡信孝施設部長の三幹部に対し「災害責任を明らかにせよ」とはげしく抗議した。